

ロベール・シューマンの国際政治観

宮下雄一郎（松山大学法学部法学科講師）

歴史に、人物の神話化は「付き物」である。フランス外交史では、ド・ゴール（Charles de Gaulle）がそうであった。ヨーロッパ統合史では、「欧州統合の父」モネ（Jean Monnet）が、やはり神話化の対象になった。フランスにおける、もう一人の「欧州統合の父」であるシューマン（Robert Schuman）もそうした一人であった。とはいえ、モネとド・ゴールと同じく、シューマンに関しても、それなりの研究蓄積がある。ヨーロッパ統合史だけではなく、ひろく国際関係史の文脈でシューマンを分析しようとした研究もある。しかし、それでも統合史の影響が強いことは否めない。

本報告の目的は、第 1 に、シューマンをとおして、フランス外交史、ヨーロッパ国際関係史を鳥瞰することである。第 2 に、シューマンをなるべく多面的に理解し、「欧州統合の父」としての側面に束縛されずに、その姿を描くことである。

1950 年の「シューマン・プラン」発表以前に、シューマンには既に長い政治経験があった。戦間期から、フランスの内政、外交、そして国際情勢と、幅広い関与、発言を行ってきたのであり、「危機の 20 年」、「1940 年のフランスの敗戦」、「1944 年の解放」、そして「終戦後の復興」と、シューマンは、20 世紀フランスの動揺を政治アクターとして見てきたわけである。駆け出しの議員の頃のシューマンは、何よりも第一次大戦の結果、フランスに戻ってきた「アルザス・ロレーヌ」の擁護に力を入れた。つまり、同地域でのキリスト教を重んじる教育制度の面での特殊性を、政教分離を標榜するフランス第 3 共和制から守ることなど、国内政治を舞台に活躍した。しかし、「アルザス・ロレーヌ」の利益擁護は、そのままドイツ問題への関心に結びつき、キリスト教の擁護も、シューマンの国際政治観に深い影響を及ぼしたのである。

たとえば、戦間期のシューマンは、ドイツに対し厳しい態度をとり、独仏の国境線に構築された要塞である、マジノ線の意義を認めた。そして、スペイン内戦に際しては、各勢力のキリスト教に対する態度の違いから、フランコ（Francisco Franco）に好意的な態度をとる一方で、人民戦線政府に反発した。さらに、一貫していたのが、ソ連と共産主義に対する強烈な警戒心と嫌悪感であった。戦前のシューマンを見てみると、「独仏和解」や「欧州統合の父」など、戦後国際関係のイメージだけでは、理解できない姿が見えてくるのであった。

こうして、シューマンをとおして、20 世紀フランス外交を長期にわたって鳥瞰できるだけでなく、彼の、今まであまり注目されなかった側面も見えてくる。戦前のシューマンを踏まえたうえで、戦後の財務相、首相、そして外相としてのシューマンを見ていくと、「独

仏和解」も、実際には単純なものではなく、葛藤があったことがうかがえる。和解の背景には、軍事、経済の面で弱体化していくフランスに対する憂慮、それに反し、復興を遂げていくドイツに対する懸念などがあったのだ。欧州統合の動きの根底には、フランスが、パワーとして、いかに国際舞台での地位を保っていくのかという問題が横たわっていたのである。シューマンは、たしかに「シューマン・プラン」という革新的な構想を発表し、ヨーロッパが歩むべき理想を示した。しかし、それは、シューマンが、パワーポリティックス的な国際政治観と決別したわけではなかった。たとえば、シューマンは、欧州統合という理想を追求する一方で、戦前からの根強い共産主義に対する脅威認識を持ち続け、ソ連との軍事衝突の可能性に言及したのである。

戦前から戦後にかけてのシューマンの国際政治観からキーワードを抽出しようとした場合、どのようなものが出てくるのであろうか。次の三つを挙げることができよう。第1に、キリスト教の擁護である。第2に、フランスに回帰した「アルザス・ロレーヌ」の擁護である。そして、第3に、終生変わることのなかった根強い反共主義である。シューマンの国際政治観をまとめるのは、なかなか困難な作業であるが、「神秘的現実主義者」と評した人物がいた。この表現が最も的確であるように思われる。